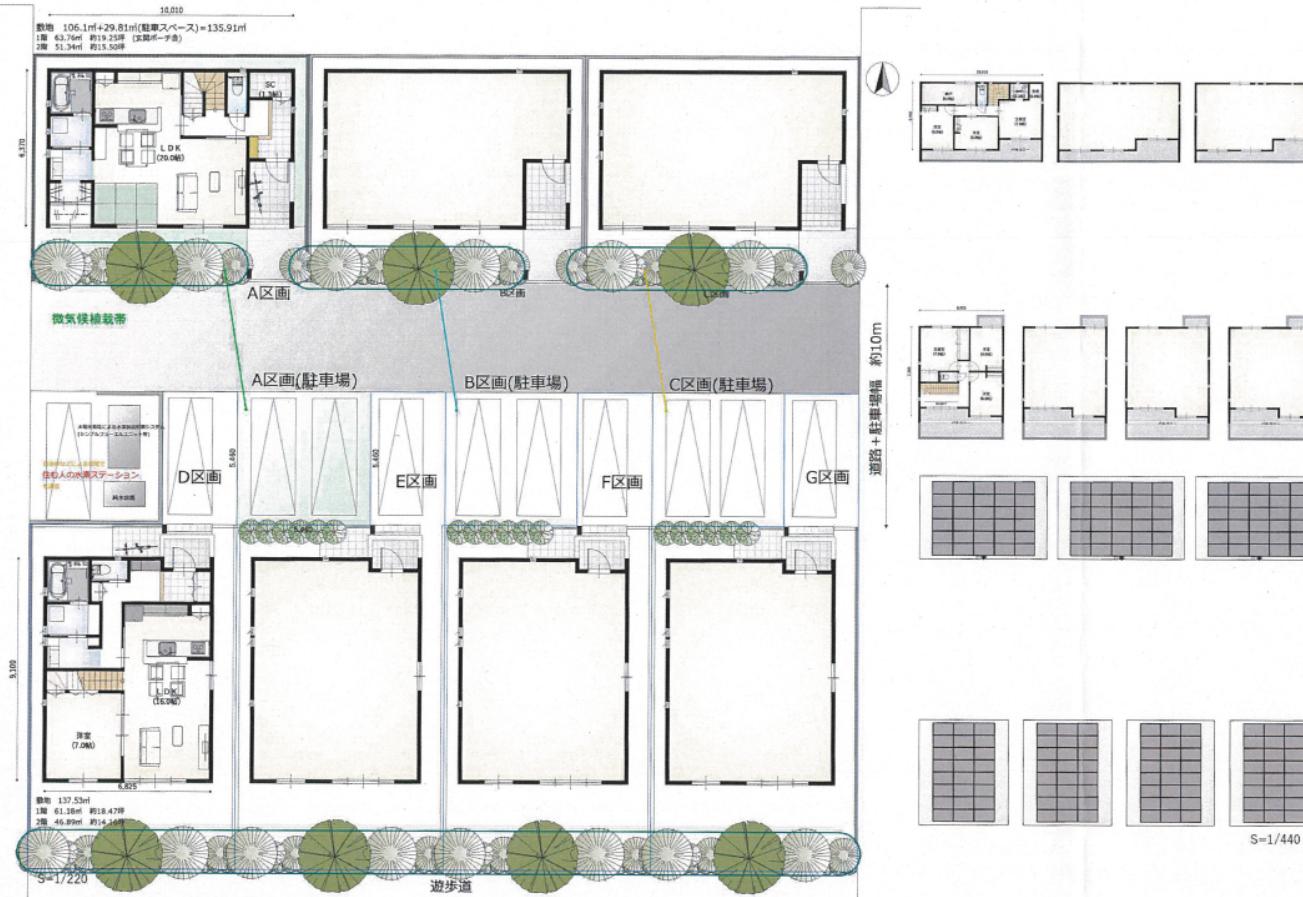


# 超環境住宅分譲モジュール



微気候植栽帯

水素ステーション

全体イメージ

## ●建物室内環境が快適に

■特例容積率適用地区のような発想で建物土地と駐車スペースの二つの敷地“一体の敷地”とみなすことでの区画全体の駐車スペースを一か所に集約する。このことにより各区画とも玄関アプローチ以外の部分に植栽を植えることが可能になる。

現実的な土地サイズ(135m<sup>2</sup>約40坪)の分譲地が緑豊かな植栽帯が計画可能になる。この植栽帯は建物の南面を覆うように計画されるため、従来あった駐車スペース(コンクリート)からの照り返しがなくなるだけでなく、植栽帯による周辺外気温度の低下で建物室内環境は格段の向上が期待される。(微気候植栽帯)

■単純化された四角い建物形状は外皮面積も凹凸のある建物形状よりUa値(外皮平均熱伝導率)も向上が期待できます。建物自体の性能のアップにも効果が期待されます。

## ●分譲地全体で小さな発電所に

■駐車スペースを分離させたことで、建物計画が単純な四角形になりやすくなる。四角形の建物形状は屋根形状もよりシンプルに単純化が期待できる。結果各建物に搭載できる太陽光パネルの設置枚数が相当数のアップが期待できる。集落全体の再生可能エネルギー(太陽光の総発電量)の生産性の向上が期待できる。

## ●地産地消のエネルギーへ

■建物ごと(世帯ごと)に発電した電力は生活のために基本は消費するが、集落全体の利益のために、生み出したエネルギーはその集落のために貯蔵したい。単純に電力の貯蔵は困難なので、余剰電力を利用して水素を生産し貯蔵する。その水素は自動車の燃料などに利用する。水素自動車はCO<sub>2</sub>を排出しない環境には最も良いエネルギーと考えることです。再生可能な電力から作り出される水素は“究極の環境エネルギー”です。

“余剰電力買取”的時代から一步前進した“地産地消型エネルギー利用”という発想です。

## ●環境配慮の新技術工法にも対応が期待

■昨今大規模木造建築で環境面などで注目されているCLT工法による住宅建築への展開も可能になります。(現在のCLT工法は、パネルの組み立て時に大型のクレーンの設置が必要ですが、道路と駐車スペースを合わせた空地幅は10m程度となるため、駐車場地権者である住民の同意で大型クレーンの設置が物理的に可能になります。)